

『十二夜』の召使たち

— 16・17世紀英国における賃金労働者 —

勝 山 貴 之

I. 序

歴史学者ジョイス・オーダム・アップルビー (Joyce Oldham Appleby) によれば、土地や労働といった社会の基本的構成要素が商取引の対象となり、経済的な価値判断の対象となることは、人間自身の存在に対する価値観の変化に繋がるとされる (15)。中世から初期近代へと時代が移り変わるなか、市場が拡大することによって、交換によって生ずる物の価値に対する考え方にも変化が生じた。従来は、商品とは見做されず、交換されることなど思いもよらなかった物、例えば「労働」もまた経済的価値基準で測られるようになった。封建的主従関係の中で生涯にわたり主人に仕えた使用人たちは、賃金労働者となり、彼らの「労働」は時間単位で売買する商品へと変貌したのである。当然のことながら、それは雇用者と被雇用者の双方の心情にも影響を与え、両者は封建社会のような「ご恩と奉公」という信頼関係ではなく、金銭を念頭においた契約によって結ばれることとなった。こうした主人と召使いの関係の変化は、初期近代の演劇の中でどのように描き出されているのか。この小論では、作品『十二夜 (Twelfth Night)』を取り上げ、作品の中に描き出された「労働」に焦点を当てながら、使用人たちの社会的地位やその流動性、更には労働に対する意識の変化について考察してみることとする。封建社会に見られるような厳格な主従関係と、初期近代の時代を感じさせる賃金労働者ともいえる召使いが共存する様を、劇の中を探っていきたい。

Ⅱ. 16・17世紀イングランドの召使い(Servants)たち

16世紀のロンドンに暮らす貴族の屋敷には実に多くの召使いがいた。1521年に、ノーサンバーランド伯爵(Earl of Northumberland)の屋敷には、166人の召使いがいたことが記されているし、1533年には、イーリーの司教(The Bishop of Ely)が100人の召使いを抱えていたことも記録に残されている。また1580年代、レスター伯爵(Earl of Leicester)の屋敷には100～150人の召使いがいたという。貴族や聖職者の屋敷だけが召使いを抱えていたわけではない。17世紀の終わりには、ロンドンの家庭の57%が一人の召使いを、21%が二人の召使いをおいていたと言われている(Richardson 64)。一般に召使いの年齢は若く、15歳から24歳の年齢層が、全体の60%から70%を占めていた。年齢50歳を超えた召使いは、ロンドンのイーリング(Ealing)地区に絞った統計において、全体のわずか2%であった。召使いが永年に渡って奉公する屋敷は、その一族の家政の安定を示す指標ともなり、家名を高めることともなったと言う。召使いの男女比では、男性の比率が圧倒的に高く、召使いの実に80%が男性という屋敷もあった。女性の召使いの数も、時代を経るごとに徐々に増加傾向を示しているものの、長期の奉公は珍しく、結婚と共に離職するのが一般的であった(Richardson 63-78)。

召使いの給金は、場所や仕事内容によって大きく異なっており、また給金の相場は市場経済によって左右され、インフレの影響で高騰することもあった。1609年にチェシャー(Cheshire)のジョージ・ブース(George Booth)という人物が、召使いの給金が高いことに不満を漏らしたことが文書に残されており、ヨークシャー(Yorkshire)のヘンリー・ベスト(Henry Best)なる人物は、かつては年18シリングで女性の召使いが雇えたのに、昨今では24シリングあるいは28シリング以下ではまともな女性召使いは見つからないと嘆いている(Richardson 80)。少年召使いは、住み込み食事付きという雇用形態が一般的であり、一人前の仕事ができるようになるまで給金は支給されな

かった。大きなお屋敷に永年仕えた召使いは、老後も主人から遺産分与が、あるいは年金がもらえるという幸運に恵まれる場合もあった。さすれば給金の額が低い職場では、召使いの反抗的態度が目立つということも、当然の成り行きであったのかもしれない。給金の男女差は著しく、男性の給金に比して女性の給金は非常に低かったことも事実である(Richardson 80)。一般に副業は、主人が特に許可した場合を除いて認められていなかったが、目立たない形で行われていたという。他所の洗濯を手伝うことでわずかながら金銭を受け取るといったことや、酒類の醸造などといった季節労働にたずさわる副業によって、主人の預かり知らぬところで給金以外の収入を得ることもあったらしい(Richardson 86)。

屋敷ごとに様々な規則が定められていた。1566年にジョン・ハリントン(John Harrington)なる人物によって定められた屋敷内の規則は興味深い。その規則によれば、召使いの起床時間や就寝時間は夏と冬によって厳格に定められており、違反した場合は2ペンスの罰金が科せられた。食事の時間も定時とされており、守らない者からは6ペンスの罰金が徴収された。その他、この屋敷では掃除の仕方や身なり服装、更には言葉遣いまで、召使いたちの行動は、規則で事細かく規定されていた(Richardson 150)。何より、違反者からは罰金という形で金銭が徴収されていたことに驚かされる。召使いたちの労働は、労働時間から規則違反の罰金に至るまで、金銭という対価で測られていたのである。

16世紀末から17世紀になると、家政のあり方や召使いへの対応方法を記した数多くの手引書が登場する。William Perkins, *Christian Oeconomie* (1590)、Robert Cleaver, *Godly Forme of Household Government* (1598)、Thomas Fosset, *The Servants Dutie* (1613)、William Gonge, *Of Domesticall Duties* (1622)、Thomas Carter, *Christian Commonwealth* (1627)、Abraham Jackson, *The Pious Prentice* (1640)などはすべて、一家の主人に家政の切りもりを指南する書物である。おそらくこうした手引書の流行の背景には、家政運営の煩わしさや、

いまや賃金労働者となった召使いたちを管理・統率していくことの難しさがあったことは容易に想像できる。手引書の著者たちは主に聖職者であり、書物を繙くと、そこには家庭こそが信仰と善行の源であることが説かれ、召使いが守るべき謙虚、従順、恥辱、実直、忠実、慎重、献身などが列挙されている。

しかし聖職者たちが家庭内における篤信の重要性を訴えれば訴えるほど、信仰篤い屋敷での奉公に、召使いたちが息苦しさを感じていたことも否めない。1613年にルイス・ベイリー（Lewis Bayley）という人物は、誠実で実直な召使いを見つけることの難しさを嘆いているし(Richardson 138-39)、1655年にフィリップ・グッドウィン（Philip Goodwin）は、「神の言葉に従い、神への信仰を重んずる家庭に、召使いたちが住みながらない」ことを述べ、「信仰篤い家庭を、召使いたちはまるで牢獄のように嫌い、たまたまそうだと知らずに勤め始めた召使いは、すぐに職場から逃げ出し、二度と戻ることはない」と断言している(Goodwin 473)。召使いたちの労働の実態は、聖職者たちのしたためた手引書の内容とは、ずいぶん異なった傾向を示していたのである。手引書に記された召使いたちがわきまえるべき道徳的規範は、その裏返しのような労働実態を物語っていたと言える。そうした世相があるからこそ、危機感をつのらせた聖職者は手引書出版のために筆を執ったのであり、召使いたちを管理監督していくことの難しさを実感し、止むに止まれず手引書を買求めるといった読者層も存在したのであろう。

Ⅲ. 社会の流動性と召使いたち

作品『十二夜』に登場する召使いたちのなかで、最も注目を浴びる存在がマルヴォーリオ(Malvolio)である。女伯爵オリヴィア(Olivia)の屋敷の執事(Steward)を務めるマルヴォーリオは、使用人たちを指揮して家事家政の一切を仕切る立場にある。一族の支えとなる男性親族を次々に失くしたオリヴィ

アは、マルヴォーリオを頼りにしていて、彼女にとっては「持参金の半分を失くしても、この人を失うわけにはいかない(“I would not have him miscarry for the half of my dowry”)」(III. iv. 62-63)ほど、彼は屋敷にとって重要な召使いである。

マルヴォーリオが執事であることは明白であるものの、彼の社会的地位となると曖昧な部分がある。劇の後半、監禁という屈辱を味わうこととなるマルヴォーリオは必死になって自分のことを「紳士(“gentleman”)」(IV. ii. 82)だと称している。当時の英国社会の様子を記した*The Description of England* (1577)の著者ウィリアム・ハリソン(William Harrison)は、本来ならば労働せずとも暮らしていける人々を指すものであった「紳士」の呼称に、幾分修正が必要であることを認めている(Harrison 113-14)。医者、法律家、聖職者、そして大学卒業者なども含めて「紳士」と称するように、時代が変化しつつあったからである(Lindheim 697)。実際、貴族の屋敷に仕えた執事は、古典の教養に通じるほどの学識を備えていたことも知られている。しかし移り変わる世相において、そうした博識ある執事ばかりとは言い切れない状況もあったらしい。当時、*A Health to the Gentlemanly Profession of Serving-Men* (1598)を執筆した I. M. と名乗る著者は「紳士階層の召使い(“gentleman servants”)」が、より下の身分の者にとって代わられていることを嘆いている(Lindheim 697)。まさに時代とともに移り変わる社会の流動性の証左であろう。

したがってマルヴォーリオの紳士階層の執事という職位は、家柄血筋という点では貴族に到底及ばないものの、身分の上昇を志向する時代の潮流の象徴的存在とも言える。このことから、オリヴィアの親類縁者であり、「騎士」の称号を名乗るサー・トビー (Sir Toby)との間に、軋轢が生じることとなる。マルヴォーリオは屋敷の家政の統括者としての立場から、夜もふけた時間に貴族の屋敷において、まるで安酒場のごとき大騒ぎをするサー・トビーたちに、「時、身分、場所をわきまえていただきたい」(II. iii. 91-92)と苦言を呈する。勤勉を旨とする、まるで家政手引き書の典型のごときマルヴォーリオからす

れば、飲酒の悪癖に染まり狼藉の限りを尽くす、名ばかりの貴族が我慢ならないのであろう。対して、「お前はたかが執事じゃないのか(“Art any more than a steward?”)」(II. iii.114)と言い返すサー・トビーの怒りは、己の身分をわきまえようとしめない、成り上がり者に対する憤りである。家柄を誇る貴族たる者にも、平然と叱責のことはを浴びせる召使いの振る舞いが彼には許せない。両者の対立は、まさに社会の流動性によって生じた軋みなのである。

サー・トビーたちの怒りは、この禁欲的で厳格な清教徒的道德観をちらつかせるばかりか、自己愛が強く身分の上昇を絶えず夢見る成り上がりの召使いを陥れるための陰謀へと展開する。マライア(Maria)の準備した偽手紙の文面によって、オリヴィアの秘めた情熱を確信したマルヴォーリオは、女主人との恋愛感情による至福よりも、己の身分の上昇により生じることとなるはずのサー・トビーとの地位の逆転を夢想して有頂天となる。マルヴォーリオが口にする「ストレーチー女子爵は、衣装係のヨーマンと結婚された(“the Lady of the Strachy married the yeoman of the wardrobe”)」(II. v. 39-40)という地位逆転の結婚が、具体的にどの史実を指しているのかは未だ解明されていないものの、当時の記録の中に、そうした婚姻例が残されていることもまた事実である(Burnett 168-69)。貴族に仕える使用人たちの空想の中では、もはや現実世界における身分の違いは乗り越えることのできない障壁とはならないのである。

だからこそ皆の罨にはめられたことを知ったマルヴォーリオの怒りは凄まじい。三つの結婚が成立する劇の大団円において、マルヴォーリオは「お前たち全員に復讐してやる」(V. i. 378)との捨て台詞を残し、皆の前から走り去る。身分の上昇をひたすら夢見たマルヴォーリオに、己の本来の身分をわきまえさせるために仕組んだ偽手紙の策略であったが、むしろそれは裏目に出たのかもしれない。マルヴォーリオは、本来の身分におとなしく戻ることを拒否し、自分を嘲笑した人々への報復を誓うからである。

マルヴォーリオと好対照を成すのが、ヴァイオラ(Viola)とセバスチャン

(Sebastian)である。劇中、男装することによってシザーリオ(Cesario)と名乗るヴァイオラは、オリヴィアに生まれ育ちを問われると、「運には恵まれていませんが、身分ある者です。紳士の生まれです(“Above my fortunes, yet my state is well: / I am a gentleman”)」(I. v. 278-79)と答えている。これが全くの嘘偽りでないとするなら、彼女と兄セバスチャンの地位は、教養を身につけられるだけの経済力を後ろ盾にしているように思われる。実際にオリヴィアはシザーリオとの邂逅を通して、「どう見ても紳士だわ。あなたの言葉遣い、その顔立ち、身体つき、身のこなし、そしてその精神が、明白に物語っている」(I. v. 291-93)と眩き、その育ちの良さを感じ取っている。更に、双子の生まれ育ちの良さは、劇の大団円でオーシーノ公爵(Duke Orsino)によっても、明白な理由を述べられはしないものの、「彼の血の中には気高さが宿っている」(V. i. 264)と断言される。劇の中では、セバスチャンとヴァイオラのように紳士、淑女でありながら、公爵や女伯爵に見初められ求婚されて、図らずも身分の上昇を手にするというエピソードも描かれているのである。当時、法学院の学生であったジョン・マニングガム(John Manningham)が、聖燭祭の夕べに『十二夜』を観劇し、執事マルヴォーリオの滑稽さを日記に書き記したことはよく知られている(Manningham 18)。同時にマニングガムの日記には、身分の高い女性に気に入られて婚約をする友人への憧れも記されている。時代は、紳士階級の人々が上流階級との婚姻を通して、貴族階級の中に入ることも不可能ではなかったことの証左である。そうした現実社会に起こりうる夢物語に憧れながらも、自惚れから絵空事の恋愛沙汰に無我夢中になる登場人物を嘲笑うという、当時の人々の複雑な心情が伺われる。身分の流動的な社会であったが故の夢と現実の相克である。

マルヴォーリオを毘にはめる偽手紙の計画において重要な役割を果たすのがマライア(Maria)である。マライアは、女伯爵であるオリヴィアに仕える侍女(waiting-gentle-woman)という職位である。従来の批評においては、しばしば彼女の地位を女召使いと混同し、劇の結末におけるサー・トビーとの結婚

が身分の低い彼女にとって成功のように捉えられる傾向があった。しかしそうした解釈は、当時の社会における侍女という身分を正確に理解しているとは言いがたい。当時の貴族の屋敷に仕える召使いたちは、圧倒的に男性が多く、料理や掃除はもちろんのこと、他の細々とした雑用も男性によってなされることが一般的であった。そうしたなか屋敷の女主人に仕える数少ない侍女は、良家の出身の者が多く、他の貴族の家庭から教育も兼ねて預けられているような者もいた。実際に、ベドフォード(Bedford)伯爵夫人に仕えた女子爵モンタギュー (Montagu, 1538-1608)は、彼女自身が男爵の娘であり、伯爵の孫という、由緒正しき家柄の出身であった。したがって、侍女を単なる女召使いと考えることは誤りで、女主人の身の回りの世話をするだけではなく、時に話し相手ともなるような存在でもあった。だからこそ、初めてオリヴィアとの面会を許されたシザーリオが、通された部屋で「当伯爵家のお嬢様はどちらですか(“The honorable lady of the house, which is she?”)」(I. v. 167)と戸惑いを見せ、共にヴェールで顔を隠したオリヴィアとマライアを取り違えるという失態を演じたのである。身分の高い二人の女性は身につけた衣服も身のこなしも、すぐには見分けがつかない存在であったのであろう。

更に、マライアは女主人オリヴィアの優雅な筆跡を見事なまでに模倣してみせる。当時の社会において優雅な筆跡は、教養の証しであり、マライアが平民の身分ではないことを物語るものである。17世紀末の手習い書を調査したナンシー・リンドハイム (Nancy Lindheim) によれば、女性の手習いは、優雅な文字で書かれた手本を書写することであったという。しかしマライアは大胆にもオリヴィアの筆跡を真似るばかりではなく、女主人の手紙の文面まで創作してみせる。そればかりかマライアは、マルヴォーリオを陥れる計画を立て、皆を率先し、更に偽手紙をしたためるという手法で、まさに陰謀の首謀者としての役割を果たす。サー・トビーが、マライアの参謀としての手腕を褒め称える根拠がここにある。サー・トビーとマライアの結婚は、従来言われていたような身分違いの結婚ではなく、マライアの行動力に惚れ込

んだ貴族サー・トビーと、彼に相応しい身分のマライアが結ばれたことに他ならない。

しかしそうしたマライアも、マルヴォーリオを毘にはめる算段を立てる際には、お屋敷に居候するサー・トビーたちばかりか、他の召使いたちをひとつにまとめていく。ここでは、周囲の皆を軽蔑し愚弄するマルヴォーリオに憤りを感じずにはおれない者たちが集い、共謀し、実行に移すという展開が重要である。身分の高いサー・トビー、サー・アンドリュー (Sir Andrew) やマライアも、そして彼らよりは身分の低いと思われるファビアン(Fabian)、更には道化フェステ(Feste)までもが一丸となって、高慢な執事をやり込める。皆が、身分を超えて団結し、模範的召使に悪ふざけをするというところに、お屋敷に暮らす者たちの力強い連帯感が描き出されている点を忘れてはならない。たとえ身分は違えど、一つ屋根の下に暮らす者たちにとって、階級を超えた一致団結の意識は、当時の観客の共感を呼ぶところであろう。

Ⅳ. 賃金労働者となった道化Feste

史実によれば、ヘンリー八世やメアリ女王の宮廷の慣習に倣って、エリザベス女王の宮廷にも道化が仕えていた。ジャック・グリーン(Jack Grene)、ジョン・ペース (John Pace)、モナーチョ (Monarcho)といった道化たちの存在を記した記録が残されている。しかし女王に仕えた道化の中でも、特に有名なのがリチャード・タールトン (Richard Tarlton) であろう。タールトンは宮廷道化でありながら、1583年にウルシンガム(Walshingham)の招集した劇団にも道化役者として参加していた (Southworth 107-20)。彼は、宮廷道化としての役割と同時に、劇団員として地方巡業に加わるという形で、二足のわらじを履いていたのである。道化の歴史的研究を行なったジョン・サウスワース(John Southworth)も指摘するように、この時代の道化は宮廷や貴族に仕える伝統的主従関係から解放され、より経済的見返りのある劇団員となり、得

意の歌や踊りを披露して、当時のエンターテインメント産業で活動するようになっていた(Southworth 121)。タールトンは1588年に死去するが、彼の後に登場するウィリアム・ケンプ (William Kempe) やロバート・アーミン(Robert Armin)といった道化たちは、王侯貴族に仕えるのではなく、劇団員として道化を演じ続けている。彼らにとって、宮廷とのつながりは、劇団が放浪取締法を免れるために王侯の庇護を求めるといった形式的なものとなり、道化役者が女王や貴族と個人的な主従関係を結ぶことはなかった(Southworth 138)。時代の変化の中で道化は、有力者の屋敷に仕える雇われの身から、自らの伎芸によって自活する芸人となったのである。そうした社会の変化は、劇作品の中にも見て取れる。

『十二夜』に描かれる道化フェステは、わざわざ「オリヴィア様の父君がとても可愛がっておられた(“a fool that the Lady Olivia’s father took much delight in”)(II. iv. 11-12)と言及されているように、オリヴィアの屋敷に永く仕える召使いである。フェステの登場は、屋敷の規則に違反し、主人の許しも得ずに外出したことを非難するマライアの叱責から始まる。ウィリアム・ゴンゲ(William Gonge)の記した家政運営の手引書*Of Domesticall Duties*. (1622)には、召使いの勝手な行動を禁ずる項目がある。

11. Of servants’ forbearing to do things without their masters’ consent.

Servants ought to forbear doing of things on their own heads without or against consent of their masters, because while the time of their service lasteth, they are not their own, neither ought the things which they do, to be for themselves: both their persons and their actions are all their masters: and the will of their master must be their rule and guide [in things which are not against God’s will]. . . .

1. Servants may not go whither they will. . . .

2. They ought not to do their own business and affairs

3. They ought not to do what business they list themselves. . . .

(Gongee “The 7 th Treatise”)

主人の許しも得ずにどこへ行っていたのかと詰問するマライアに対して、フェステは答えるどころか反抗の態度を見せている。「(首にされる) 覚悟はできているのね」(I. v. 21) とのマライアの警告にも、彼は動じることはない。そこへ登場する女主人オリヴィアもフェステを持って余しているらしく、道化の不謹慎を非難する (“Besides, you grow dishonest” I. v. 42)。フェステは、すぐさま機転を利かせて、道化らしいユーモアでオリヴィアの気を惹くも、傍にいたマルヴォーリオからは手厳しい非難を浴びせかけられる。「知恵ある者として、老衰と共にいささかはけるもの、ましてや愚かなる者の頭は、ますますその愚鈍ぶりに拍車がかかります(“Infirmity, that decays the wise, doth ever make the better fool”）」(I. v. 76-77) と、マルヴォーリオはフェステを愚弄する。先代から寵愛をかけられていたフェステも、屋敷の主人が変わり、執事から面と向かって「知恵のない与太者(“a barren rascal”）」(I. v. 84)と侮辱されるのであるから、現状は決して居心地の良いものではない。この屋敷でのお勤めも考え直さねばならない時期にきているのかもしれない、という彼のおかれた立場が理解される。「覚悟はできているのね」とのマライアの問いに答えた道化の「そうでもないが、二つの点で覚悟はしている(“Not so, neither, but I am resolv’d on two points –”）」(I. v. 22-23)という台詞は、既に他の職場をあてにしていることを意味しているのかもしれない。中世の封建社会を生きた召使いたちが、仕えた主人に終生の奉公をしたことに比べると、フェステは運の向くまま、気の向くままに、職場を渡り歩くことを厭わない初期近代の賃金労働者としての精神を体現する人物として描かれている。

劇中、フェステは実に多くの駄賃を受け取っている。サー・トビーとサー・アンドリューに自慢の喉を披露することで駄賃を受け取り、オーシーノ公爵に所望されて小歌を歌って駄賃をもらう。更にシザーリオに、ねだって心付

けを倍にさせ、セバスチャンからも金銭を投げ与えられている。そればかりか第5幕ではオリヴィアの屋敷を訪れたオーシーノから、またもや駄賃を受け取っているのである。シザーリオが、駄賃を渡そうとするオリヴィアの申し出を、「私は駄賃のために走り使いをする者ではございません(“I am no fee’d post”)」(I. v. 284) と毅然と断ることを考えると、フェステの金銭への執着は際立っている。こうした駄賃も召使いの手引書では禁じられた行為である。

12. Of the unlawful liberty which servants take to themselves.

Contrary to the forenamed limitations of servants’ liberty are these, and such like lewd and licentious pranks as follow.

...

2. When being bound to their master’s service, they do their own business, and seek their own profit; and that without their master’s leave.

(Gongee “The 7 th Treatise”)

劇の登場人物で、他に駄賃を受け取る者はいないことを考えると、道化の行動は注目に値する。

オリヴィアの屋敷で夜更けにも関わらず大騒ぎをするサー・トビーとサー・アンドリューは、フェステの美声と踊りのうまさ、更にはそのおふざけの話術を絶賛し、小歌を披露してくれるよう所望して、それぞれ6ペンスずつの駄賃を与える。

Sir And. By my troth, the fool has an excellent
breast. I had rather than forty shillings I had such
a leg, and so sweet a breath to sing, as the fool has.
In sooth, thou wast in very gracious fooling last night,

when thou spok'st of Pigrogromitus, of the Vapians
passing the equinoctial of Queubus. 'Twas very good,
i' faith. I sent thee sixpence for thy leman; hadst it?

Clo. I did impetico thy gratillity ; for Malvolio's
nose is no whipstock, my lady has a white hand, and
the Mermidons are no bottle-ale houses.

Sir And. Excellent! Why, this is the best fooling,
when all is done. Now a song.

Sir To. Come on, there is sixpence for you. Let's
have a song.

Sir And. There's a testril of me too. If one knight
give a--

Clo. Would you have a love-song, or a song of good life?

Sir To. A love-song, a love-song. (II. iii.19-37)

彼らは、フェステの芸を評価するだけの鑑賞力を備えている点で、道化をただただ侮辱するマルヴォーリオとは大違いである。フェステの台詞を辿ると、「マルヴォーリオはけちで、そうやすやすとは駄賃をくれないし、女主人オリヴィアは貴族でいらっちゃって、ご自分の手を卑しい金銭などでお汚しになることもない。忠臣のミウルミドンのようなおいらは、安酒場じゃあ満足できねえ」と言いながら、更なる駄賃をねだっている。しかしフェステがいくらサー・トビーやサー・アンドリューに気に入られていようと、オリヴィアの屋敷における二人の立場を考えると、後ろ盾としては心細い限りである。オリヴィアやマルヴォーリオに冷たくあしらわれている以上、道化として生きていくためには別の道も考えておかねばならない、といった状況が描かれる。

フェステが雇い主オリヴィアの屋敷を抜け出して度々出入りしているの

は、オーシーノ公爵の屋敷である。公爵も、フェステの歌のうまさを高く評価する人物のひとりであり、道化は自分が公爵の屋敷で重宝されていることに気付いている。公爵は、屋敷の何処かにいると思われるフェステをわざわざ捜させてまで、その歌声をシザーリオに聴かせようとするからである(II. iv. 14)。フェステは、万が一オリヴィアの屋敷での奉公が難しくなった場合には、自分の伎芸を評価してくれるオーシーノのもとで奉公しようと考えているのかもしれない。しかしオリヴィアの屋敷に抱えられた召使いである以上、他の屋敷へ出入りして、新たな働き口を見つけようとすることは許されない。女主人のオリヴィアから解雇される危険を冒してまでも、道化は新たな職場を求めているのである。主人に絶対的な忠誠心を抱き、服従することを強いられた、封建社会の召使いを思い浮かべるなら、何より損得勘定を優先するフェステは、明らかに異なる労働意識を持った存在であることがわかる。

他方、主従関係を重んじ、主人の遣いを果たすにあたって、駄賃のような金銭を受け取ることを良しとしないシザーリオは、フェステとは異なり、封建的で伝統的な社会の勤労意識を抱いている。オーシーノの恋の伝令という辛いお役目も、主人の命令とあれば絶対服従の姿勢で臨むシザーリオからは、彼(女)の職務に対する姿勢が窺われる。オリヴィアの屋敷へ出向いたシザーリオはフェステを見かけて、二人の機知合戦が始まるが、シザーリオはフェステに勝るとも劣らない機知を見せて道化を感嘆させる(III. i. 1-13)。フェステはシザーリオの機知の中に、その言葉遊びを楽しむ才能を瞬時に見抜き、相手が道化の伎量を評価できる人物であることを嗅ぎとるのである。

しかしシザーリオが、フェステはオリヴィアの屋敷のお抱えの道化なのに、オーシーノ公爵の屋敷にも出入りしていることを遠回しに非難すると(III. i. 31, 37)、フェステは「阿呆は、お日様と同じだね。いつだって地球の周りを回っている、どこでだって光ってまさあ(“Foolery, sir, does walk about the orb like the sun, it shines every where.”)」(III. i. 38-39)と巧みな言い逃れをする。両

屋敷を行き来して忠義に背いていることを指摘され、痛いところを突かれたフェステであるが、まさに彼の言葉どおり、道化という職業は己の伎芸一本で暮らしを立てているわけで、自らの技と才能に誇りを持っている。そこには、地位も名誉もなくとも、自分の腕一本でこの世を渡っていく道化の心意気がある。シェイクスピアは、シザーリオの台詞を通して、そうした道化の才覚を称賛する。

Vio. This fellow is wise enough to play the fool,
 And to do that well craves a kind of wit.
 He must observe their mood on whom he jests,
 The quality of persons, and the time;
 And, like the haggard, check at every feather
 That comes before his eye. This is a practice
 As full of labor as a wise man's art;
 For folly that he wisely shows is fit,
 But wise [men], folly-fall'n, quite taint their wit. (III. i. 60-68)

「甘い蜜のような」美声でもって歌を歌い、巧みなステップで踊りを披露し、縦横無尽に機知を駆使して人々の笑いを引き出す道化は、その道にかけては一級のエンターテイナーであり、それは誰もがができる仕事ではない。そればかりか、フェステにとって伎芸を披露することは、「苦労ではなく喜び(“No pains, sir, I take pleasure in singing, sir”)」(II. iv. 68) に他ならず、自分の好きなことを生業(なりわい)としているのである。フェステは自らの才能を武器に浮世を漂うように、同時にしぶとく力強く生き延びる。

マライアからサー・トープス(Sir Topas)を演じるように言われたフェステは、自分は学者には似つかわしくないと言いながらも、「正直者で、人当たりが良くて上手に家の切り盛りするってのと、骨身を削って学問をする

立派な学者だっていうのも、大きな変わりはないさ(“to be said an honest man and a good house-keeper goes as fairly as to say a careful man and a great scholar”)(IV. ii. 8-10) と呟く。彼は身分の違いに、憧憬や不満などを抱くことなく、むしろ現状の自分の地位を潔く享受しているのである。フェステの信条は、まさに庶民として真っ当な生き方をし、周囲の人間と協調していくことに他ならない。そうした道化から見れば、マルヴォーリオは己の身分に満足せず、絶えず地位の向上を求めてやまない愚か者でしかない。「俺は正気だ、お前と同様正気なんだ(“I am as well in my wits, fool, as thou art”)(IV. ii. 88)と躍起になって主張するマルヴォーリオに対して、「やっぱり気が触れてたんだ。阿呆と同じ頭でしかないって言うんじゃないあ(“Then you are mad indeed, if you be no better in your wits than a fool”)(IV. ii. 89-90)と切り返す。そして劇の大団円では、かつてマルヴォーリオより浴びせられた「知恵のない与太者(“a barren rascal”)(I. v. 84)という侮辱のことばを今一度引用して、道化の伎芸を全く理解しようとしない、家政の手引書に描かれた手本のような清教徒的執事に見事な一矢を報いるのである。

... But do you remember? “Madam, why
 laugh you at such a barren rascal? And you smile not,
 he’s gagg’d.” And thus the whirligig of time brings in
 his revenges. (V. i. 375-78)

自惚れるあまり、自分の周りの者を愚弄しつつも、「投げ与えられる高貴な身分(“greatness thrown upon them”)(V. i. 371)には嬉々として飛びつくようなマルヴォーリオとは異なり、己の身分をわきまえながらも、自分の伎芸のみを頼りに人の世を渡る道化は、厳しい現実社会をしなやかに生き延びる。「ヘイホウ、雨と風(“With hey ho, the wind and the rain”)(V. i. 390)、「来る日も雨ばかり(“For the rain it raineth every day”)(V. i. 392)と歌うフェステの歌

声は心地よく、同時に力強く、観客の耳に響いたはずである。

トマス・グレシャム(Thomas Gresham)によって、王立交換所(The Royal Exchange)が建設されたのが1566年から1567年のことであった。交換所は国際貿易の中心としての役割を果たし、多くの外国商人が訪れ、交換所の周辺には多くの店舗が軒を並べて、海外製品の売買が行われた。時期を同じくして、芝居小屋レッド・ライオン座が開業し、やがて劇場座やカーテン座がオープンする。ロンドン市が更なる商業的繁栄を経験すると共に、グローヴ座や黒僧座といった劇場が次々と誕生して、そこには多くの観客が詰めかけた。商人たちが、商店で魅力的な商品を人々に売りさばいたように、役者たちは、舞台上で自分たちの演ずる娯楽を民衆に売ったのである。役者たちの迫真の演技や、道化の歌や踊りは、金銭で売り買いされる商品となったと言えるであろう(Bruster 1-11)。このように考えると、宮廷道化のリチャード・タールトンが、封建的主従関係の身でありながら、己の伎芸を頼りに道化役者となって舞台に登場し、多くの観客を沸かせたことも当然の成り行きと思われる。そして劇中のフェステの姿にも、封建的な制度を逃れて、自分の思うままに浮世を生きのびる、この時代の道化の生き様を見て取ることができるのである。

エリザベス朝の舞台では、上演の終わりに役者たちが舞台で音楽に合わせて踊ることによって、劇場の雰囲気盛り上げたという。舞台の最後で、登場人物たち全員が舞台に整列し、音楽に合わせて踊るのを目にしながら、観客は舞台上の役者たちの姿に憧れ、その自由さに心惹かれたであろう。制度の上ではパトロン貴族の庇護のもと、封建社会の主従関係を隠れ蓑にしながら、劇団は大衆劇場で興行をうつことによって木戸銭を稼いだ。請われれば、どこへでも出向いて得意の歌や演技を披露して観劇料を手にした。自分たちの、伎芸だけを頼りに、それを面白がり楽しんでもくれる人々の慰め・癒しとなりながら、渡世の荒波をかいくぐり、生き延びたのである。地位の高い者の姿も、貧しく卑しい者の姿も、あらゆる空蟬(うつせみ)の姿を演じ続け

る役者たちは、現実世界で己の身分の上昇を願うことなど、虚しく儚いことであることを知り抜いていたのかもしれない。むしろ己の才覚だけを頼りに、現実社会を力強く生き抜いていく役者たちの姿は、封建社会の勤労意識から解放された象徴的な存在であったのかもしれない。

V. 結

『十二夜』という作品の解釈において、ともすれば男装の麗人ヴァイオラの活躍に焦点があてられることが一般的であった。しかしこの小論では、当時の家政の手引書を繙きながら、召使いのおかれた状況を掘り起こし、使用人の立場から作品を見直してみるということを試みた。そこには封建社会の主従関係から抜け出して、初期近代的な商業的賃金労働者として生まれ変わりつつある召使いたちの、労働に対する価値観の変化を読み取るができるように思う。劇場に詰めかけた観客の多くが、雇う側よりも雇われる側の人間が多かったとするなら、威張りちらす執事が皆にやり込められる様は、人々の日頃の鬱憤を晴らし、まさに胸のすく思いであったであろう。また身分の上の者も、身分の下のも一丸となって、清教徒的利己主義者を懲らしめる様子に、屋敷に暮らす人々の一体感を再認識させ、身分を超えた共同体としての連帯感を意識する契機となったのかもしれない。同時に、己の才覚だけを頼りに、厳しい現実社会をしたたかに生き抜こうとする道化の姿は、自分もまた使用人である観客たちに、勇気と活力を与えたはずである。そしてそれはしがない役者とされる者たちにとっても、ささやかながら自分たちの生を肯定するという自己主張の機会を提供したのではないであろうか。

参考文献目録

Primary Sources:

- Carter, Thomas. *Christian Commonwealth*. (1627)
 Cleaver, Robert. *Godly Forme of Household Government* (1598)
 Fosset, Thomas. *The Servants Dutie*. (1613)
 Gonge, William. *Of Domesticall Duties*. (1622)
 Goodwin, Philip. *Family Religion Revived* (1655)
 I.M. *A Health to the Gentlemanly Profession of Serving-Men* (1598)
 Jackson, Abraham. *The Pious Prentice*. (1640)
 Perkins, William. *Christian Oeconomie*. (1590)

Secondary Sources:

- Anderson, Linda. *A Place in the Story: Servants and Service in Shakespeare's Plays*.
 Associated UP, 2005
 Appleby, Joyce Oldham. *Economic Thought and Ideology in Seventeenth-Century England*.
 Princeton UP, 1978.
 Bruster, Douglas. *Drama and the Market in the Age of Shakespeare*. Cambridge UP, 1992.
 Burnett, Mark Thornton. *Masters and Servants in English Renaissance Drama and Culture: Authority and Obedience*. Macmillan, 1997.
 Coddon, Karin S. “‘Slander in an Allow’d Fool’: *Twelfth Night*’s Crisis of the Aristocracy.”
Studies in English Literature, 1500-1900. Spring:33(2) 1993, pp.309-25.
 Dowd, Michelle M. “Labours of Love: Women, Marriage, and Service in *Twelfth Night*
 and *The Compleat Servant-Maid*” *The Shakespearean International Yearbook*.
 Edited by Graham Bradshaw and Tom Bishop, Ashgate, 2005, pp.103-26.
 Evett, D. *Discourses of Service in Shakespeare's England*. Palgrave Macmillan, 2005.
 Harrison, William. *The Description of England: The Classic Contemporary Account of Tudor
 Social Life*. Edited by Georges Edelen. The Folger Shakespeare Library and Dover
 Publications, 1994.
 Kemps, Ivo. “Madness and Social Mobility in *Twelfth Night*.” *Twelfth Night: New Critical
 Essays*. Edited by James Schiffer, Routledge, 2011, pp.229-43.
 Kussmaul, Ann. *Servants in Husbandry in Early Modern England*. Cambridge UP, 1981.
 Lindheim, Nancy. “Rethinking Sexuality and Class in *Twelfth Night*.” *University of
 Toronto Quarterly*, 76(2), 2007, pp. 679-713.
 Malcolmson, Cristina. “‘What You Will’: Social Mobility and Gender in *Twelfth Night*.”
Twelfth Night: Contemporary Critical Essays. Edited by R. White. St. Martin’s

- P, 1996, pp.160-93.
- Manningham, John. *Diary of John Manningham of the Middle Temple, and of Bradbourne, Kent, Barrister-at Law, 1602-1603*. Edited by John Bruce, Esq., J. B. Nicholas and Sons, 1868.
- Neasman, Everett G. *Take My Coxcomb: Shakespeare's Clown-Servants from Late Feudal to Proto-Capitalist Economies in Early Modern England*. iUniverse, 2009.
- Neill, Michael. *Putting History to the Question: Power, Politics and Society in English Renaissance Drama*. Columbia UP, 2000.
- O'Day, Rosemary. *The Professions in Early Modern England, 1450-1800*. Routledge, 2014.
- Renen, Dany Van. *The Other Exchange: Women, Servants, & the Urban Underclass in Early Modern English Literature*. U of Nebraska P, 2017.
- Richardson, R. C. *Household Servants in Early Modern England*. Manchester UP, 2010.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Edited by G. Blakemore Evans, 2nd ed., Houghton Mifflin, 1997.
- Southworth, John. *Fools and Jesters at the English Court*. Sutton, 1998.
- Wall, Wendy. *Staging Domesticity: Household Work and English Identity in Early Modern Drama*. Cambridge UP, 2002.
- Weil, Judith. *Service and Dependency in Shakespeare's Plays*. Cambridge UP, 2005.

Synopsis

Social Mobility in Sixteenth- and Seventeenth-Century England and *Twelfth Night*

Takayuki Katsuyama

As the Middle Ages gave way to the early modern era, both things and actions that had not been considered exchangeable commodities were transformed into exactly that. For example, servants who, under the feudal master-servant system, had been bound to their masters by life-long tenure found themselves transformed into wage laborers; and their “labor” was in turn transformed into a commodity that could be bought and sold by the hour. Focusing on changing concepts of “labor,” this essay examines the lingering presence in *Twelfth Night* of servants of the definite feudal type alongside servants who could more rightly be called commercial wage laborers (and who are therefore characteristic of the early modern era).

16th century aristocrats in London employed many domestic servants. The wages of servants varied greatly according to their status and the nature of their work, and a market economy dictated the rate of pay, which sometimes rose due to inflation. Each house had its own set of rules and regulations, though it is interesting to note that these rules tended to follow a model laid down by a John Harrington of Somerset in 1566, about whom relatively little is known. According to these rules, waking and sleeping hours for servants were strictly fixed for summer and winter, and a fine of 2d was imposed on any servant deemed guilty of violations. Mealtimes were

also fixed, and a fine of 6d was levied on those who failed to observe them. Other rules governed the behavior of house servants dictating how they should clean, how they should dress, and even how they should speak; and, again, money was collected in the form of fines imposed on violators. The labor of servants was therefore measured in terms of money, whether in the form of hours worked or fines incurred.

There are many servants, such as Cesario, Malvolio, Maria, Feste and Fabian in *Twelfth Night*. Cesario/Viola peremptorily refuses Olivia's offer of money, saying, "I am no fee'd post" (1.5.276), as if he still acted on ideas concerning how labor was regulated in feudal society. On the other hand, it is conspicuous that Feste, a clown-servant, is well compensated by many people. This suggests that money, not fealty, chiefly motivates Feste. A clown who sings beautifully, dances skillfully, and delights with his wit is a first-class entertainer (what we now call a "triple-threat" actor). He serves the coin, not the nobility. Compared with servants in medieval feudal society, who held, or were constrained to, life-long tenures, Feste moves from place to place, as luck and inclination dictate. In other words, he is a freelancer—as laborers like him would be called under capitalism—*avant la lettre*.

The appearance of servants such as Feste registers a change in consciousness, regarding labor among the servant classes: they were breaking away from the master-servant relationships that characterized feudal society, refiguring themselves as commercial wage laborers in the early modern era. These clowns' attempts to survive in a harsh new world, relying entirely on their talents—on the labor they could bring to market—must have heartened the audiences in public theaters, which included numerous playgoers who were also servants. In Feste we find a kind of

reflection, from stage to audience and audience back to stage, illustrating socioeconomic changes within the Elizabethan servant-class.